

TV 報道検証【報道特集】 報告書

テレビ局：TBS	番組名：報道特集	放送日：2020年8月15日
出演者：金平茂紀、日下部正樹、膳場貴子、宇内梨沙		
<p>検証テーマ：戦没者追悼式、政治家と靖国参拝、知覧とハワイで姉妹館提携</p> <p>札幌で赤紙再現したチラシで反戦を訴える市民団体、オープニング、韓国の光復節</p> <p>モーリシャス沖で三井商船の船舶から重油流出、アメリカと TikTok</p> <p>国連安保理と対イラン武器輸出禁輸措置、米軍と UFO</p> <p>【特集】「艦船と感染症」の関係は？南シナ海緊張、【特集】戦時中の感染拡大に人体実験も</p>		
<p>報道トピック一覧</p> <ul style="list-style-type: none"> ・戦没者追悼式 ・政治家と靖国参拝 ・知覧とハワイで姉妹館提携 ・札幌で赤紙再現したチラシで反戦を訴える市民団体 ・オープニング ・韓国の光復節 ・静岡県の2地点で 39.7 度 ・山梨県でも 39.3 度 ・気象情報 ・東京都で新型コロナの新たな感染者が 385 人 ・モーリシャス沖で三井商船の船舶から重油流出 ・アメリカと TikTok ・国連安保理と対イラン武器輸出禁輸措置 ・埼玉県のコンビニに高齢者の運転する車が突っ込む ・東京都の歯科医師がエアガンで車の窓ガラスを割り逮捕される ・米軍と UFO ・【特集】「艦船と感染症」の関係は？南シナ海緊張 ・【特集】戦時中の感染拡大に人体実験も 		
<p>放送法第4条の見地からの検討・検証および該当トピックの報道内容要旨</p> <ul style="list-style-type: none"> ・戦没者追悼式：結論→特に問題なし <p>戦没者追悼式について以下に朱記したような VTR が取り上げられていた。</p> <p>"5歳の時に父親をなくした男性「フィリピンのルソン島のサンチャゴで戦死なんです。もっと早く終戦をしていただければ、家の親父なんかも20年の4月19日なんですよね。」</p> <p>4歳の時に父親をなくした男性「沖縄で機銃掃射でやられた。一級建築士でね、一番活躍しているときだったんだけどね、赤髪一枚で招集されてね。」</p> <p>生後6ヶ月で父親を亡くした女性「母と姉と二人だけでお見送りに言ったっていう、お母さん頼むね、それが最後だった。」"</p>		

"ナレ「終戦から 75 年、戦時中を知る世代の遺族が少なくなる中、全国戦没者追悼式に最年長で参列したのは 93 歳の長屋昭次さん、兄を中国戦線で亡くしました。」

長屋昭次「亡くなった兄は非常に体が弱かったので、まあ戦地に言っても苦労したと思います。」

ナレ「長屋さん自身も少年飛行兵として朝鮮半島の飛行訓練場で終戦を迎え、何人もの先輩を特攻で亡くしました。」

長屋昭次「亡くなった先輩などのことを考えますと、絶対戦争はやってはいけないと思います。今あの政治に携わる人達はちょっと私たちの考えとは異質な考えを持っておられる方がおられるような気がします。間違った方向に行かないように常に念願しています。」

ナレ「最年少で参列したのは 12 歳の井田雪花さん、ちょうど 100 歳年の離れた曾祖父が南太平洋で戦死しました。」

井田雪花「曾祖父が平和な世界を望んでいると感じたので、参加しようと思いました。」 "

"天皇陛下「過去を顧み、深い反省の上に立って、再び戦争の惨禍が繰り返されぬことを切に願います。」

ナレ「天皇陛下は去年に続き、深い反省との表現を用いて追悼の意を示されました。」 "

このトピックについて当てられた時間は 148 秒で放送法上は特に問題は見られなかった。

・政治家と靖国参拝：結論→特に問題なし

政治家の靖国参拝について以下に朱記したような VTR が取り上げられていた。

"萩生田光一（文科相）「先の大戦で尊い犠牲となられた先人の御霊に謹んで哀悼の誠を捧げてまいりました。」

高市早苗（総務相）「決して外交問題にしてはいけないし、外交問題ではありえないと私は考えます。」

ナレ「東京九段北の靖国神社には安倍内閣の高市総務大臣、萩生田文科大臣、小泉環境大臣、衛藤沖縄北方担当大臣の四人が訪れ参拝しました。終戦の日に閣僚が参拝するのは四年ぶりです。」

高鳥修一（自民党特別総裁補佐）「本日はですね、自民党、安倍総裁の名代として玉串料を奉納いたしました。」

ナレ「一方、安倍総理本人は今年も参拝を見送り、自民党の高鳥総裁特別補佐を通じ、私費で玉串料を納めました。」 "

"尾辻秀久（みんなで靖国参拝する会会長）「どうしても密という状態になるのでね、」

ナレ「超党派のみんなで靖国神社に参拝する国会議員の会は新型コロナウイルスの感染に配慮し、今年は集団参拝を見送っています。」 "

このトピックについて当てられた時間は 67 秒で放送法上は特に問題は見られなかった。

・知覧とハワイで姉妹館提携：結論→特に問題なし

知覧の特攻平和会館とハワイの記念館が姉妹館提携を結んだとのことについて以下に朱記したような VTR が取り上げられていた。

"ナレ「特攻基地のあった鹿児島県知覧の特攻平和会館と沖縄戦で特攻攻撃を受け、日本の降伏文書調印の舞台ともなった戦艦ミズーリを展示するアメリカハワイの記念館が終戦 75 年の節目に姉妹館提携を結びました。」

テロップ「新型コロナの影響でリモートでの協定書調印に」

ポール・ダイソン（戦艦ミズーリ記念館 COO）「ハワイと日本が今もよい絆でつながっているのが嬉しい。」

塗木弘之（過南九州市市長）「平和の尊さ、命の尊さというものを一緒に伝えていけたら。」 "

このトピックについて当てられた時間は 39 秒で放送法上は特に問題は見られなかった。

・札幌で赤紙再現したチラシで反戦を訴える市民団体：結論→特に問題なし

札幌での反戦市民団体の活動について以下に朱記したように VTR が取り上げられていた。

"ナレ「赤紙一枚で否応なく戦場に送られた時代を忘れないでほしい。札幌の市民団体が配ったのは戦時中の召集令状、赤紙を再現したチラシです。」

市民団体の代表「紙切れ一枚で有無を言わず、侵略戦争へと駆り出されたのです。」

赤紙を受け取った人「同じような世代の人達がこうして戦争に生き、こうやって亡くなられたと思うと子どもたちの未来のためにそういった事は二度とないようにと、今日は来ました。」

ナレ「受け取った人たちは平和の大切さを噛み締めていました。」 "

このトピックについて当てられた時間は 42 秒で放送法上は特に問題は見られなかった。

・オープニング：結論→特に問題なし

番組の冒頭で金平キャスターが「75 回目の終戦の日です、コロナウイルス感染が拡大する中この事態を戦争に例える声が聞かれるんです、けれども戦争は人間が人間に対して起こすものです、一方似ているところもあります、例外的な状態が当たり前の状態になってしまうことです。戦争と感染症、総力特集でお伝えします。」とのコメントしていた。このシーンに当てられた時間は 21 秒で放送法上は特に問題は見られなかった。

・韓国の光復節：結論→特に問題なし

膳場キャスターの「ではニュースです。韓国では今日、植民地支配からの解放を祈念する光復節を迎えました。」とのコメントおよび日下部キャスターの「ムン・ジェイン大統領は徴用工問題について向かい合って座る準備ができています、と述べて日本政府に対話を呼びかけました。」とのコメントを受けて以下に朱記したような VTR が取り上げられていた。

"ナレ「光復節の記念式典は新型コロナウイルス対策のため出席者を大幅に絞って行われました。」

ムン・ジェイン大統領「一人の人権を尊重する日本と韓国の共同の努力が、両国国民の有効と未来協力の架け橋になると信じます。」

ナレ「ムン・ジェイン大統領は徴用工問題について今も協議の扉を開いている、いつでも日本政府と向かい合って座る準備ができています、と対話を呼びかけ、批判を避けました。ただ、司法の判断を尊重する姿勢は変わっておらず、解決への道筋は見えていません、一方、ソウル中心部では複数の市民団体が感染対策のために禁止されている集会を強行しましたが、大規模な反日集会は開かれませんでした。ソウル市などでは感染が再び広がる懸念が高まっていて、明日から感染対策のレベルが上から 2 つ目の第二弾回に引き上げられます。」 "

このトピックについて当てられた時間は 82 秒で放送法上は特に問題は見られなかった。

・モーリシャス沖で三井商船の船舶から重油流出：

日下部キャスターの「今も重油の回収作業が続いています。」とのコメントを受けて以下に朱記したような VTR が取り上げられ、ナレーションによって「商船三井が運行する貨物船が座礁したインド洋モーリシャス沖では既に 1000 トン以上の重油が海に流れ出ました。現地では地元住民ら数千人が集まり、髪の毛や藁をネットに詰めて海に流れた重油を吸い取る作業をしています。事故原因は現在も調査中ですが、地元メディアは船は Wi-Fi の接続を求めて島に近づいた、などと報じています。」とのことが伝えられた。

このトピックについて当てられた時間は 32 秒で放送法上は特に問題は見られなかった。

・アメリカと TikTok : 結論→特に問題なし

ナレーションによって「アメリカのトランプ大統領は 14 日、中国の IT 企業バイトダンス社に対し動画投稿アプリ TikTok のアメリカ国内での事業を 90 日以内に売却するよう命じました。トランプ氏はアメリカの安全保障を損なう行動を取りうる確信できる証拠があると指摘し、売却命令の正当性を強調。既に 9 月 15 日までにアメリカのマイクロソフト社などによる買収が成立しなければ国内での運営を禁止する考えを示していましたが、交渉の決着に向けて圧力をかけた形です。」とのことが伝えられた。このトピックについて当てられた時間は 36 秒で放送法上は特に問題は見られなかった。

・国連安保理と対イラン武器輸出禁輸措置 : 結論→特に問題なし

ナレーションによって「中東イランに対する武器禁輸措置が今年 10 月に期限切れを迎えるため国連安全保障理事会で禁輸措置を延長する決議案が採血されました。しかし、案を提出したアメリカと別の一カ国しか支持をせず、決議案は否決されました。理事国 15 カ国の内同盟国のイギリスやフランスなども棄権に周りアメリカの孤立が浮き彫りとなりました。決議案の否決を受けてアメリカのポンペオ国務長官は安保理の過ちを正していくと反発しています。」とのことが伝えられた。

このトピックについて当てられた時間は 37 秒で放送法上は特に問題は見られなかった、

・米軍と UFO : 結論→特に問題なし

膳場キャスターによって「アメリカ軍が特別チームを作り UFO にまつわる調査に乗り出したことがわかりました。アメリカの国防総省は 14 日、UFO 未確認飛行物体の可能性がある、などとして波紋を広げている空中での現象について国家安全保障に脅威をもたらす可能性があるとして検出・分析し記録するチームを新たに設置すると発表しました。国防総省は今年 4 月、海軍の航空機が撮影した不審な飛行物体のように見える 3 つの映像を公開し正体については未確認だとしました。今後、軍はこうした現象を検出した場合、組織的に記録に残し、情報の分析を進めるものと見られます。」とのことが伝えられた。

このトピックについて当てられた時間は 54 秒で放送法上は特に問題は見られなかった。

・【特集】「艦船と感染症」の関係は？南シナ海緊張 : 結論→特に問題なし

膳場キャスターの「特集です。戦後 75 年を迎えた今日は、戦争と感染症についてお伝えします。」とのコメント、金平キャスターの「軍艦での感染症は、旧日本軍が最も恐れたものの一つでした。百年前のある事件の教訓は今に活かされているのでしょうか。」とのコメントを受けて以下に朱記したような特集の VTR が取り上げられていた。

ナレ「在日アメリカ海軍横須賀基地。今月 1 日、JNN のカメラは、甲板に数十機の戦闘機が積まれた原子力空母ロナルド・レーガンの姿を捉えた。戦闘機を積んだ状態で母港に戻るのは異例だ。乗組員や、戦闘機のパイロットが、船を降りることは許されなかったとみられる。入港からわずか 8 時間というスピードで出港した。アメリカ軍では、空母内の感染拡大を防ぐため、異様な緊張感が高まっているという。」

元米国防次官補ローレンス・コーブ氏（吹替）「船を下りるとウイルスを広げたり、感染したりする恐れがあり、空母の即応性が失われます。皆問題の深刻さを認識しているのだと思います。」

ナレ「新型コロナウイルスは、今、アメリカ海軍に、大きな混乱をもたらしている。」

"空母の乗組員「(歓声と拍手)」

ナレ「今年4月、一人の軍人が惜しまれつつ、空母・セオドア・ローズベルトを去った。船を下りたのは、ブレット・クロージャー氏。突然艦長を解任された。」

海軍長官代行（当時）トーマス・モドリー氏（吹替）「感染拡大の最中、最悪の判断。火に油を注ぐ行為です。」

ナレ「その一か月前、インド・太平洋に展開していたセオドア・ローズベルト。ベトナムに帰港した後、乗組員に新型コロナの感染が広がった。クロージャー艦長は、最高幹部らにあてて、一刻も早く乗組員を降ろし、船を消毒するよう求める書簡を送った。しかし、対応はとられず、書簡が流出し、メディアに報じられると、クロージャー氏は責任を取らされてクビになった。」

トランプ大統領（字幕）「艦長が送った書簡は、5ページに及ぶものだった。こんな書簡を書くなんて文学の授業じゃあるまいしひどい行為だ。彼は巨大な原子力空母の艦長なんだ。艦長にふさわしくない人物だ。」

ナレ「結局、乗組員4500人のうち、1156人が感染し、1人が死亡。空母を前線に展開できない事態に陥った。」

金平（字幕）「艦長の行動は適切だったかと思うか」

ローレンス氏（吹替）「クロージャー氏は艦長ならば誰もがとるべき行動を取ったと思います。軍の上層部は影響を軽視したかったのです。リーダーたちが断固とした行動をとらず、対応が遅れたことで、必要以上に感染が広がったのです。」

ナレ「新型コロナウイルスは、一時的にせよ、インド・太平洋地域に、アメリカの空母が全く存在しないという異例の事態を引き起こした。」

ナレ「米空母不在。この間隙を縫うように、宮子海峡を、空母遼寧を中心とした中国の艦隊が通過した。熾烈な情報戦の一端がうかがえる。」

ナレ「今、東シナ海と太平洋の分岐点、宮子海峡が安全保障上、日・米・中3か国の最重要拠点となっている。」

報道特集巡田忠彦記者「こちらが太平洋です。そしてこちらが、東シナ海。沖縄本島まで、宮古島から279キロです。ここを抜けて、中国艦隊が太平洋に出ていきます。」

ナレ「感染の拡大は、アメリカと中国が、激しく対立するこの海域のパワーバランスを、崩しかねないのだ。」

ナレ「海上自衛隊でも、新型コロナへの緊張がピークに達している。今年5月、中東海域の情報収集に向かった護衛艦は、日本近海で、事実上2週間待機。発症者がいないことを確認して現地に向かった。海上自衛隊では、100年前、旧日本軍を襲ったある事件が、今も語り継がれている。」

(CM)

ナレ「100年あまり前、日本の軍艦でクラスター、集団感染が起きた。軽巡洋艦の矢矧をスペイン風邪が襲い、10人に1人が死亡した。そのスペイン風邪とは、第一次世界大戦最中の1918年に発生したインフルエンザパンデミックだ。戦場に向かう兵士たちの移動によってウイルスが各地に運ばれた。世界で数千万人もの死者を出したといわれる。戦時下の国々は、感染の事実を隠した。一方、中立国だったスペインでは、大きく報じられたため、スペイン風邪と名付けられた。」

大阪毎日新聞「世界の端から端まで流行している感冒。」

ナレ「日本でも、”流行性感冒”と呼ばれ、猛威を振るった。医療機関はひっ迫し、学校は休校に。宴会の自粛も、積極的に呼びかけられた。」

"ポスター「マスクをかけぬ命知らず！」

ナレ「これは、政府が国民にマスクの着用を呼び掛けるため作成したポスターだ。町中には、マスク姿の女学生や、警察官も。有効なワクチンや治療薬も存在せず、国内での犠牲者は、38万人ともいわれる。」

ナレ「旧日本軍の中でも、軍隊病などと恐れられ、海軍においては、今でいうソーシャルディスタンスを確保するため、寝具のハンモックは頭と足の部分を交互につるした。こうしたスペイン風邪の大流行の中で起きた矢矧

の悲劇。そこから今の時代にも通じる教訓を読み取ることができる。」

"祝詞? 「たち一さかえたまえと、かしこにかしこにも」

ナレ「愛知県岡崎市に軍艦矢矧ゆかりの神社がある。本殿の一角にあるのは、100年前に、乗組員らから寄贈されたという矢矧の模型だ。」

"矢矧神社 川喜田隆司宮司「これ100分の1の模型なんですけどね、これを艦内でお作りになったと思いますけども、あの一寄贈していただいたんです。」

日下部「これすごい精密ですよ。」

川喜田氏「ふっふっふ。」

日下部「これ100年前のものですか、これ?」

川喜田氏「はい。」

ナレ「第一次世界大戦当時、矢矧はインド洋など各地で、輸送船の護衛にあたっていた。これは防衛省に長年保管されていた矢矧の航海日誌だ。『流行性感冒に関する報告』。そこには、艦内にウイルスが持ち込まれ、多くの犠牲者を出すまでの一部始終が記されていた。」

"ナレ「大戦末期の1918年11月、別の巡洋艦と交代するよう命じられ、シンガポールに寄港した矢矧。」

日誌より「艦内侵入防止につきては、細心の注意を払い、下士卒の上陸を禁止。」

"ナレ「シンガポールでのスペイン風邪の流行を警戒し、艦長は当初、乗組員の上陸を禁止していた。しかし、交代の船の到着が遅れる中、ついに、上陸を許可してしまう。」

日誌より「下士卒に対し、約4時間上陸を許可セリ。」

ナレ「予防薬をを飲み、うがいを行ったうえで、4時間に限っての上陸だったが。」

"川喜田さん「だいぶあの、そのころは、シンガポールも落ち着いてきて、士気も上がるからだろうからっていうんで、まあ、許しちゃったんじゃないですかね。」

川喜田氏「(帰国前に)最後の土産でも買ってこいじゃないですか。ねえ。」

日下部「ある意味、情の部分が・・・」

川喜田氏「情です。情でしょうね。」

日下部「それが仇になった」

川喜田氏「仇に・・・うん・・・」

"ナレ「悲劇の始まりは、上陸から2週間後だった。」

日誌「突如、4名の熱性患者、発生す。」

ナレ「船に戻ってきた乗組員の中から、発熱の症状を訴えるものが出た。直ちに兵員室に隔離されたが、その後も同じような症状を訴えるものが相次いだ。目の当たりにした矢矧の軍医は・・・」

日誌より「単に上甲板に就寝したる事実ありたりをもって、普通の風邪なるべし。」

ナレ「甲板で寝ていたため、風邪をひいたのだ。と、軽く見た。その後、交代の巡洋艦が到着したため、矢矧はそのまま次の目的地、マニラに向けて出港した。しかし、」

日誌「夕食後、総員の検診を行いたるに、約25名の熱性患者を発見。」

ナレ「この夜以降、患者の数は増え続け、翌日には69人に、重症化するものもあらわれ、船内の雰囲気は、一変する。艦長は、ここでようやく、スペイン風邪に感染したことを、認めるに至った。」

"日誌「流行性感冒と診定し、これを旗艦に報告する。」

ナレ「艦内では、看護にあたる乗組員までも発症し、日を迫うごとに事態は深刻化していった。」

ナレ「ウイルスは、三密の空間で作業を行う機関部に広がり、とうとう船の航行に影響が出始めた。治療にも手

が回らなくなり、感染者はあっという間に 100 人を超えた。そして・・・」

"日誌「一等機関兵、種々手当を尽くしたるも、死亡セリ。」

ナレ「ついに、死者を出すまでに。やっとの思いで、マニラに到着後、患者らは市内の病院に運ばれたが、既に手遅れの状態だった。乗組員、469 人のほぼ全員が、感染。全体の 1 割以上にあたる 48 人が亡くなるという、最悪の結末を迎えたのだ。死亡者のほとんどが、階級が低く、入院を後回しにされた下士官以下に集中していたという。」 "

"日下部「実際にこう、初代矢矧っていうのは、戦ったんですか？」

川喜田氏「実際には、してない」

日下部「してないんですか。じゃあ矢矧にとっての戦いってのは、本当にそのスペイン風邪だったんですね。ウイルスとの戦いなんですね。」 "

ナレ「矢矧の悲劇は、軍艦の中で、感染症が発生する恐ろしさを、知らしめた。その後の太平洋戦争で、矢矧の名は、新たに作り替えられた船に引き継がれた。」

ナレ「そこで航海士として従事していた池田武邦さんは、当時の張り詰めた状況について、こう語った。」

池田さん「だから外部の人は、うかつにいれないですよ。出るときもね、入るときもね、全部チェックして、変なものを持ち込んでいないかとか、すぐに体温を、あの一熱がないかどうかをチェックして、」

ナレ「外部からの、食料はすべて検疫され、消毒に。病気にかかった乗組員が船から降ろされることも、頻りにあったという。」

池田さん「もう一人でも、なんか、そういう病気になると、たちまち船の中は、家族みたいなもんですからね。それから同じ船ですから、もう 1 人がなったら全員やられちゃうんですよ。だから、そういう、衛生に関してはものすごい、あの、嚴重でしたね。」

ナレ「そして、1991 年、自衛隊発足後、初の海外派遣の時も、感染症の危険に直面する出来事があった。」

(CM)

ナレ「1991 年、湾岸戦争直後、機雷除去のために、掃海艇部隊 6 隻がペルシャ湾に派遣された。日本から 1 万 3000 キロ。同行した医療関係者が、1 か月の航海中、感染症の危険を感じたことがあった。」

同行の医療関係者の話「水と、食料を供給するために、ある港に入りました。始めて降りる未知の陸地です。変な予感がしました。近づいてくる住民が顔色も極めて悪いことに気が付きました。港周辺の衛生状態も劣悪で、これでは何かの”感染症”にかかると、危険を感じたのです。乗組員にも注意喚起し、早々に船に戻り、ペルシャ湾に向かいました。補給した水は、甲板水として、掃除にしか使いませんでした。」

ナレ「自衛隊の海外派遣は常に感染症の危険と隣り合わせなのだ。はたして船内での感染症に対する有効な手段はあるのだろうか。」

ナレ「史上最強の護衛艦といわれ、ミサイル防衛の要でもあるイージス艦。全体の情報を把握して制御しているのが、機関室だ。応急班と呼ばれる乗組員たちが、艦内の危機管理を行う。」

ナレ「イージス艦はアメリカ海軍の技術がベースで、核爆弾の放射能にも耐えうる構造になっている。」

イージス艦みょうこう応急長「ちょうど風船を膨らませたような状態を作り出して、まあそこからこう、空気を取り込むには、こう、防毒マスクみたいな、大きいやつなんですけど、そこから空気を取り込んで、うまくこう艦内をちょっと、気圧を高くして、放射能が入らないように。」

ナレ「しかし、関係者は、感染症には対応のしようがないと、口をそろえる。」

ナレ「護衛艦隊司令官などを歴任した古庄幸一元海上幕僚長も、艦船内の拡大防止は、不可能だと話す。」

"記者「空母も含めた軍艦の感染症対策ってのは手の打ちようがないですか？」

古庄氏「無いと思いますね。」

記者「ない？」

古庄氏「空気はもう、(艦内を) 回っているわけですから、それはやっぱり、それはもう、無理だと思う。だから、いかに早く港に入って、乗員を陸の、その方に移動して、艦内をクリーンナップするか。船のその調理室の、今日の料理は何やってるか。というにおいが回るんですよ。そうすると仕事しながら、ですから空気が回ってきて、カレーの匂いがする。あっ、今日昼カレーか。あっ、じゃあ今日は金曜日かみたいな」

ナレ「最新鋭のイージス艦ですら、感染症に対しては、お手上げ状態だというのだ。」

古庄氏「そういう感染症にかかったらとかっていう事前の教育をしたかっていうと、やってないですね。」

ナレ「フィリピン・マニラの郊外に佇む日本人の墓と刻まれた墓石。ここにかつて、スペイン風邪で命を落とした矢矧の乗組員たちが、眠っている。100年前の惨事から、私たちは何を学んだのかを、問いかけるかのように。」

(CM)

CMをはさみ、スタジオでは以下に朱記したようなやり取りが繰り返された。

膳場「あの今回クルーズ船ダイヤモンドプリンセスで新型コロナのクラスターが発生したことで、初めて船内での、感染症の難しさ、恐ろしさっていうのを知ったんですけども、実はもう100年も前から、日本では、軍艦、船内での感染症と向き合ってきている。戦争と感染症というのは、表裏一体だということなんですけど、その割にその経験というのかな、知見のいうのか、そういうものって共有されていないですね。」

日下部「そうですね。矢矧のですね、航海日誌を読んでいるとですね、最初は風邪だろうと軽く見て、ところが容態が急変する。次々と重症化して手が付けられなくなる。まるで100年後、我々が体験しているようなですね、記述が続くわけですね。しかも100年前ってウイルスの存在まだ知られていなかった。このスペイン風邪についてはですね、日本ではまとまった研究が、残されていないって言われていて、矢矧神社の関係者の間でも、集団感染について忘れられつつあったんですね。ですから、まさに今回の新型コロナウイルスの拡大が、100年前の悲劇を掘り起こしたといえるんですね。」

金平「それにしても、あの、航海日誌よく残っていたって言う風に思うんですけどね、残っていたからこそ、100年前の検証が今日できる、今できるわけですね。記録に残すこととか、公文書としてきちんと、残しておくことってのがいかに、大切なことかと、情報公開がいかに大事なことかってのが、分かるんですけども、戦争ではですね、感染症の発生とかっていうのが、利敵行為になる、敵に利する行為になるからと、ひたすらに隠そうという傾向が出てくると、それが、例えばアメリカの空母ルーズベルトの集団感染のようなですね、今に至るアメリカの体質に引き継がれてると言う風に、思いますね。」

で、翻って今の政府はどうだろうと、日本政府は。これはあの、特定の担当大臣とか、特定の知事さんは、頻繁に記者会見やるんですけどね、肝心なことは出さなくてですね、やっぱり今からでも、分科会とか、専門家会議とかは議事録をちゃんと作ってですね、明日からでもちゃんとそれを公開すべきだっていうふうに思いますね。」

この特集について当てられた時間は1383秒で放送法上は特に問題は見られなかった。

・【特集】戦時中の感染拡大に人体実験も：結論→特に問題なし

膳場「えーさて戦いに勝つことを最優先にした戦時下では、感染症から国民を守ることは、後回しにされました」とのコメントおよび、日下部キャスターの「2つの熱病の拡大。そして、人体実験まで。当時、何が起きたのか、取材しました。」とのコメントを受けて以下に朱記したような特集のVTRが取り上げられていた。

日下部「どうもどうもどうもこんにちは」

ナレ「東京・神田に旧日本軍の装備品を扱う店がある。ところ狭しと並ぶのは、実際に戦場で使われていた品々

だ。」

ナレ「その中には感染症対策にあっていた衛生兵の道具もある。」

店主「これ、八丈島から復員なされた衛生兵の方の持ちもんで、一式そうなんですけどね。注射器、体温計、ヨーチン、重曹、で、まあ三角巾ですよ。」

ナレ「特に東南アジアなどの南方戦線で必需品だったのが・・・」

"日下部「これは？」

店主「あっ、あのこれ、えー軍用の南方の島嶼用、の防虫蚊覆って僕ら軍用語でいうんですけど、あの、マラリアよけですね。ある種のブヨとか、蚊とか。」 "

ナレ「マラリアとは、蚊が病原体を媒介して巻き起こす感染症だ。高熱や吐き気といった症状があり、脳の障害なども併発。場合によっては死に至る。」

ナレ「日本陸軍が、将校向けに作った手引書には、こう書かれている。」

手引書「マラリアは熱地作戦の最大の敵である。」

"日下部「これが、蚊よけ。用の」

店主「これは裾を後ろで絞るっていうね。ここだね」

日下部「ここで絞る。」

店主「はい」

日下部「入ってこないね。こっちが前ですね。」

店主「はい。で、あるとないとで、やっぱり違ったと思いますよ。こんなんでも」

日下部「まあ風通しはいいですよ。」

店主「マスクよりもいいかも分からないですけどね。」

日下部「あーそうですね。はい。」 "

ナレ「これは、虫刺されを防ぐ手袋だ。指先が開くように作られていて、つけたままで、銃が扱える。」

"日下部「いかに、こう軍隊という組織が、感染症に対してですね、まあ、恐れを持っていたというか、準備をしていたか。」

店主「きわめて敏感ですね。1個師団、1個連隊が、もう2000人以上、これがかかったら、もう、戦わずしてっていうことになりますし。」 "

ナレ「だが、こうした装備もむなしく、多くの日本兵がマラリアに倒れた。」

ナレ「マラリアで死にゆく何人もの仲間を見てきた元衛生兵がいる。102歳になる沼田豊雄さんだ。」

沼田氏「これガ島の石だ。」

ナレ「”ガ島”とは、1942年8月、日本軍がアメリカ軍と初めて本格的な地上戦を行った西太平洋のガダルカナル島の事だ。半年にわたる激戦の末、日本軍は大敗した。この慰霊碑は、沼田さんたちガ島の生還者が、戦友のために建てたものだ。」

沼田氏「感無量だね。2万人が亡くなってるんです。」

ナレ「投入した兵士3分の2を失い、日本が敗戦に向かう転換点ともなったこの戦い。死者の多くは、戦闘ではなく、飢えや感染症によるものだった。」

沼田氏「半分以上はマラリア。半分以上マラリア。ほいで併発すっからね。いろいろなもの。」

ナレ「衛生兵だった沼田さんまでもが、マラリアに感染した。」

沼田さん「私は2回。マラリアに。頭、痛くなるの。めまいがする。2回目にはね、目が見えなくなってくんの。歩くに。ほんで、自分に『バグノン』というのさして、『バグノン』っていうのはね、特効薬」

ナレ「幸い、沼田さんは回復することができたが、野戦病院の劣悪な衛生環境の中で、命を落とす兵士は多かった。」

沼田さん「衛生兵殿、ウジに食われて痛い。って騒いでんの。死んで3日すると、顔が無えんだよ。ハエがくっちまうの。骸骨。」

ナレ「病死者が続出した最も大きな要因は、物資の不足だ。アメリカ軍により、日本の輸送船は次々と撃沈。大本営は十分な補給を送ることができないまま、兵士たちに戦いを続けさせていた。」

ナレ「元中隊長の橋本長生さん。99歳。物資が全く届かない状況に愕然としたという。」

橋本さん「体の弱い人とか、病気になった人は治りっこない。薬はないんだし、食べ物ないんだし。食べたものは、要するに腐ったもの食べてるんだから。どうにもしようがない。何をしたら、何ができるか、なんにもできない。お前もか。頑張れよ。それだけ。もう死ぬなよも言われぬ。死ねとも言われぬ。また一人減っていくなあ。」

ナレ「140人を指揮していたが、病や飢えで弱っていく仲間を前になすすべがなかった。」

橋本さん「迷惑かけませんから。おいていってください。私もたくさんのたくさんでもないけど、いわゆる部下がいるんだから、こんな本命だった、そんな人一人にかかるとわけにはいかんから、んなこといわんとがんばれよもう、おれとかも行くからな。自爆したそう。みんな手りゅう弾一発を持っとったから。ほんであの、何人かは、そういうことで自爆。」

ナレ「当時、蚊の対策に有効だったのが、蚊取り線香だ。殺虫剤メーカーのキンチョーには、戦時中の蚊取り線香が保管されている。」

男性「戦争中はこれです。やっぱり贅沢は敵だという時代ですから、パッケージも簡素にしろということで、簡素になってます。この当時は天然の除虫菊、除虫菊の粉で作っています。」

ナレ「蚊取り線香の原料、除虫菊。戦前の日本は、世界の生産高の、およそ85%を占める最大の産地だった。除虫菊製品は、世界各国に輸出されていて、最大の相手国がアメリカだった。しかし、戦争が始まると、食料増産が優先され、日本の除虫菊生産は、減少していく。」

大日本除虫菊（金鳥）上山久史専務取締役「戦争の、戦線に送り出す量の除虫菊の確保というのは、難しかったと思います。」

ナレ「一方、連合国側は、」

上山氏「アメリカは、日本からの除虫菊が入らなくなるってということで、ケニアを産地として育ててました。だから向こうは、やっぱ考えてるんですよ。もう戦略品が入らなかつたら、多少金をかけてでも、栽培できる所で、栽培したらいいって。」

ナレ「これは、アメリカ軍の衛生対策を記録した映像だ。映っているのは、BUG BOMBと呼ばれる除虫菊を使った殺虫剤。殺虫成分を噴射するエアゾール式だ。殺虫剤開発を重視したアメリカ。一方除虫菊生産を減らして、戦争に負けた日本。戦後、エアゾール式のバグボムへのあこがれから生まれた商品が、スプレー缶タイプのキンチョールだという。」

上山氏「戦争中にアメリカ軍がこれ使ってるの見てた日本兵が、その、戦後、あれを日本で使いたって思って、その、エアゾールの会社を立ち上げていかれるんです。一緒にしませんかってお声がけをいただいて、この戦争に負けたんは、このエアゾールだと思ったんでしょね。で、それを持ってたアメリカの方が強かった。」

ナレ「アメリカ軍も、ガダルカナル島の戦いで勝敗を分けたのは、軍事力ではなく、衛生管理の差だったと総括していた。これは、アメリカ陸軍の情報部が、1942年から、部内向けに発行していた広報誌。日本兵捕虜の証言などを基に、こう分析している。」

情報誌 (INTELLIGENCE BULLETIN) 「日本軍の部隊内では、マラリアの影響が極めてひどく、死亡率はけた外れなうえに破滅的。」

ナレ「軍事史を研究する一ノ瀬俊也教授は、アメリカ軍はさらに、こう分析していたと話す。」

埼玉大学 一ノ瀬俊也教授「アメリカ側の観察では、日本軍というのは、残念ながら人命というのを、あまり重視していなくて、兵士たちに十分なケアをしない。生きている兵士（傷病兵）というのは厄介者扱いして、どうかすると、味方の手で殺してしまう。そういう事がかなりあるというふうに見ていたようです。」

ナレ「南方戦線の兵士たちが、マラリアで苦しんでいたころ、本土でも感染症が広がり始めていた。1942年7月、長崎で原因不明の熱病が発生。」

昭和18年3月「軍医団雑誌」「今次、長崎市における大流行。不明熱性疾患多発。」

ナレ「およそ1か月後、感染症の正体が、特定された。」

雑誌「デング熱と決定。」

ナレ「デング熱とは、東南アジアなどに生息する蚊を媒介して発症する感染症だ。デングウイルスを持った蚊に刺されると、発熱や激しい頭痛などを引き起こし、重症化すれば、死に至る。いまだにワクチンがない恐ろしい病気だ。これは、当時の街の罹患状況を示す地図だ。黒い丸が患者。町中の至る所で、デング熱を発症したとみられる。」

ナレ「当時の様子を知るため、長崎に向かった。港にほど近い丘陵地帯にある十人町。人口、600人余りの小さな町で、デング熱は広まった。すでにデング熱のことを知る人がほとんどいない中、実際にかかったという人に、会うことができた。」

"記者「失礼します。」

ナレ「吉田親生さん 86歳。小学生のころ、デング熱にかかったという。」 "

吉田さん「もう聞いただけでも、どうかなるぐらい、それはもうみんなかかりましたから。みんなかかりました。」

ナレ「その時の苦痛を、今もはっきり覚えていた。」

吉田さん「すごい高熱ですよ。も一あの一歩くこともできない、足がねパンパンですよ。で、用足しに行くにも、こう連れて行ってもらわないと、どうにもならんと。いうぐらい・・・」

ナレ「吉田さんの家では、家族8人のうち、母親以外デング熱にかかった。十人町で瞬く間に広まったデング熱。発症から2カ月で434人が感染。長崎市内全体でも4000人以上が罹患した。多くの死者も出たとみられている。」

ナレ「東南アジアの感染症がなぜこの時期に長崎で広がったのか。」

ナレ「発端は、マレー半島から帰港した軍用船。乗組員がデング熱を発症し、そのまま持ち込まれたとみられている。戦争が広めた感染症。さらに本土で拡大した原因も、戦争に関わるものだった。当時、国は、空襲に備えるため、家庭にあるものを設置するよう、求めた。十人町の自治会長が、案内してくれたのは、」

自治会長「これですよ。これが水って書いてあるんですかね。」

ナレ「それは、防火水槽だった。もともと十人町は、坂にあるため、水はけがよく、蚊が大量発生するようなことは無かった。だが、防火水槽を置いたことで、ボウフラがわき、デング熱の感染源となる蚊が一気に増えてしまったのだ。」

ナレ「熱帯の感染症に詳しい長崎大学の森田教授はこう話す。」

森田教授「普段はないような防火水槽、そういうところで、蚊が大量に生産されるような状況だったので、えーその伝搬速度というのは、通常よりも、もっと高かったというふうに想像されますよね。」

ナレ「国は、こんな予防策を考案していた。防火水槽にためた水の上に、石油の層をつくり、ボウフラを死滅させるという方法だ。」

森田教授「油を上には置いとけば、ボウフラが、呼吸できないんですよ。有効な方法ですよ。それはだからあの、あんまり笑う対象じゃなくて、当時そういう方法で、やられてたんだなーと、思いました。」

ナレ「だが、この対策はほとんど周知されてなかった。吉田さんは、別の方法で、蚊の繁殖を防いでいた。」

吉田さん「金魚のフナを入れると、ボウフラ湧かないじゃないですか。ああ。もう小さいボウフラでも食べてしまうわけですから。友達のところ行って、金魚ふなをもらっちゃー大事に持って帰って、そのあれにいたもんですよ。」

ナレ「それでも、デング熱の感染者は日を追うごとに増え続け、発症から4カ月、長崎市内では2万人を超えた。治療薬もなく、人々が不安な日々を過ごすそのさなか、最前線で戦う兵士を救うためにある実験が始まった。」

"資料「人工的、感染実験を行い・・・」

ナレ「それは、人体実験だった。」"

(CM)

ナレ「デング熱で人々が苦しんでいたその最中、最前線で戦う兵士を救うために、ある実験が行われていた。1943年に出版された医学雑誌。東大医学部の細菌学教室でおこなれた実験の論文が、掲載されている。」

論文「デング熱患者の発病初期の血液を、皮内摂取の他、鼻腔内塗布、点眼、咽頭塗布等の方法を以て、人工的感染実験を行い、」

ナレ「それは、人体実験だった。医療ジャーナリストの牧潤二氏はこう話す。」

牧潤二氏「発症した人の血液を採ったりして、次の人にうつるかどうかみたいなのを、やりました。」

ナレ「人体実験は、長崎で感染した人の血液を、別の人の体に注射したり、鼻の穴やのどに塗り込んだりして、次から次へと感染するかどうかを調べるといったものだった。さらに・・・」

牧氏「普通ならこの最初の段階は、動物実験でやるんですけど、いきなり人で、やってるわけですね。病院に入っている入院してるような人を対象にしているわけですから、要するに実験台ですね。他にももちろん精神障害の方が、そういう人たちは強引にもう、選んでしまおうことになるわけですし、」

ナレ「人体実験には、結核や、精神疾患などで入院する多くの患者たちが、利用されていた。なぜそこまで強引に行ったのか。」

牧氏「戦争最優先というような時代だったわけですよ。南方に進出した兵隊さんに対して、いかにデング熱を予防するか、あるいは、治療するかということが、最優先されたわけですから、」

ナレ「敗戦が濃厚となった1944年に入ると、南方との船の行き来は途絶え、デング熱の勢いは衰えた。そして、翌年の8月9日・・・。原爆投下で、長崎の街は、壊滅的に。蚊を大量発生させた防火水槽も壊れてなくなった。」

ナレ「研究者たちが集めたデング熱に関する資料も、焼失した。戦争によって広がったデング熱は、戦争の終わりとともに、終息を迎えた。」

特集のVTRを受けて、スタジオでは以下に朱記したようなやり取りが繰り返されられた。

膳場「あの太平洋戦争で亡くなった軍人・軍属たちの6割にあたるおよそ140万人は、餓死・病死といわれているんですよ。国が兵士の命をどう考えていたかが、一端がうかがえる数字だと思うんですけども、どうでしょう。今回の取材にはガダルカナル島などで亡くなった兵士の遺骨収集活動を行っています全国ソロモン会にも協力をいただきました。今年は新型コロナウイルスの影響で、現地に行くことは叶わなかったそうです。遺族の高齢化などもありますけれども、なんとか全ての遺骨を返すまで活動を続けたいとおっしゃってました。」

日下部「よくですね、戦争が、科学技術を発展させたといわれますけれども、医療技術も同じでね、兵士を救うために外科手術とかですとか、医薬品などに飛躍的にこう、進歩したんですね。」

日下部「一方で、VTRにあったように戦争に勝つためだと人体実験が行われ、さらに、敵を倒すために細菌戦までに進んでいくわけで、まあ、兵士を救う医学、人間を殺す医学。戦争の中でこうした矛盾がですね、平然と両立していたんですね。」

金平「まあ今、日下部さんが言った指摘を補いますとね、旧日本軍の731部隊ってのが、これが人体実験を行っていたというようなあまりにも有名な話ですけども、医学者が戦争に協力していたっていう悲しい歴史がありますですね。それで今ガダルカナル島の戦争マラリアの軍人が倒れたっていう話をしてみましたですけど、沖縄では実は、戦争中にですね、住民が日本軍によって強制移住させられて、たくさんの島民が、マラリアで亡くなったっていう悲しい歴史もありますですけどね。あの一コロナが今広がっていてですね、私たちは、命がいかに尊いかということをおもな実感してると思うんですよ。それからひとりひとりの命ってのが、選別されてはいけないんだという想いをみなさん強くしていると思うんですけども、戦争という行為はそれとは真逆の行為でね、だからこそ私たちは、その戦争っていうのは、やっちゃいけないんだという想いをですね、今日終戦記念日ですからますますそういう想いをですね、VTRをみながら強くしましたですね。」

この特集に当てられた時間は秒で放送法上は特に問題は見られなかった。

最高裁判例の見地からの「印象操作」に関する所見および該当トピックの報道内容要旨
特になし

検証者所感

・オープニング

番組の冒頭で金平キャスターが「75回目の終戦の日です、コロナウイルス感染が拡大する中この事態を戦争に例える声が聞かれるんです、けれども戦争は人間が人間に対して起こすものです、一方似ているところもあります、例外的な状態が当たり前の状態になってしまうことです。戦争と感染症、総力特集でお伝えします。」とコメントしていたが「例外的な状態が当たり前の状態になってしまう」ということも似ているが、それ以上にもっともらしい理由をつけて公権力が私たち一人ひとりの生活への介入干渉を強めてくること、そしてメディアもその片棒を担いでくる、ということも非常に似てはいないだろうか。「新しい日常」だとかを盛んに喧伝するメディアこそ、戦争の時の過ちを深く反省する必要があるだろう。

そう言えば、今の厚生労働省の前身である旧厚生省はもともと大東亜戦争のさなかに第一次近衛内閣によって衛生や健康を専門的に司る省として内務省から衛生局と社会局が分離独立する形で設立されたこと、第一次近衛内閣での厚生省の設置はそもそも広田内閣で寺内寿一陸軍大臣が提案したことがきっかけとなっていたこと、こうした厚生労働省の出自および設立のミッションそのものが戦争と非常に密接に結びついていること、というのは改めて忘れてはならないことではなかろうか。

・【特集】戦時中の感染拡大に人体実験も

金平キャスターが「あの一コロナが今広がっていてですね、私たちは、命がいかに尊いかということをおもな実感してると思うんですよ。それからひとりひとりの命ってのが、選別されてはいけないんだという想いをみなさん強くしていると思うんですけども、戦争という行為はそれとは真逆の行為でね、だからこそ私たちは、その戦争っていうのは、やっちゃいけないんだという想いをですね、今日終戦記念日ですからますますそういう想

いをですね、VTR をみながら強くしましたですね。」とコメントしていたが、「命の選別があってはならない」ということはまったくもってそのとおりであるが、コロナやインフルエンザのワクチンを巡る昨今の報道を見ると、どうも高齢者や基礎疾患を持つものなど重症化リスクの高い人にワクチンを優先的に割り当てるとの流れがあるようだが、私たち一人ひとりからすると、重症化リスクの低いとされる人も重症化する恐れはあり、またそうした実例もある。重症化リスクが低いとされたためにワクチンを割り当てられずに感染してしまい挙げ句重症化してしまった場合あるいは最悪命を落としてしまった場合などにそうした人たちや遺族はワクチンの割当に納得できるのだろうか、とても疑問である。

このように考えると、重症化リスクの高い人に優先的にワクチンを割り当てる、というのもある意味では「命の選別」の一種と言えなくはないだろうか。